様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　5 月 24 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007 年度～2009 年度
課題番号：19720063
研究課題名（和文）ドイツ・オーストリアにおける群衆論の史的展開

研究課題名（英文）A Study on the History of Mass Discourse in Germany and Austria

研究代表者
海老根　剛（EBINE TAKESHI）
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00419673

研究成果の概要（和文）：本研究は両世界大戦間のドイツ語圏（ドイツ・オーストリア）における群衆をめぐる言説を、文学、哲学、心理学、社会学などの言説領域を横断する視点から分析することによって、該当時期の群衆論の全体像を解明した。また、この学際的アプローチにもとづく言説史的考察よって、これまでの研究では十分に明らかにされてこなかった群衆論の歴史的パラダイムの形成と展開を明らかにし、文学と同時代の人文社会科学および社会情勢との緊張関係を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：On the basis of an interdisciplinary examination of the mass discourse in Germany and Austria in the interwar period, this research highlighted the paradigmatic changes in the theoretical framework of the mass discourse.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	300,000	0	300,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	1,000,000	210,000	1,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：　独文学・比較文学・群衆・社会思想

１．研究開始当初の背景

本研究は、1900 年代初頭から 1930 年代までのドイツを中心とするドイツ語圏における群衆論の歴史的展開を包括的に論じることを目的としていたが、このような研究は、これまでのところ、ドイツ語圏においてもなされていなかった。

これまでの研究では、哲学、心理学、社会学、文学などの個別分野の枠組みの中で、群衆がどのように主題化され、分析されてきたかが考察されてきた。そのさい、それぞれの言説分野を横断して、個別分野の諸言説を相互に連関づけることは、ほとんどなされてこなかった。このような学際的視点の欠如により、従来の群衆論研究では、20 世紀初頭の数十年間に様々な学問領域で生み出された群

衆論にみられる共通の主題的関心や、その歴史的変遷が正確に認識されないままになっていた。本研究は、このような研究状況の認識にもとづき、学際的アプローチをとることにより、これまでの研究の弱点を克服し、新たな知見をもたらすことを狙いとして実施されたのである。

また、これまでの群衆論研究は、異なる諸社会で生まれた群衆に関する言説を、かなり雑駁にヨーロッパ文化の歴史的文脈のなかで考察してきており、よりローカルな歴史的・社会的文脈の中で群衆論の展開を分析することが稀であった。この点でも、本研究は、ドイツ語圏、とくにヴァイマル時代のドイツに焦点を絞って群衆論の展開を考察することにより、いままで見分けにくかった群衆論の歴史的な輪郭を鮮明に描き出すことに注力した。

２．研究の目的

本研究の目的は、20 世紀初頭から第二次世界大戦にいたる時期のドイツ語圏（主にドイツおよびオーストリア）における群衆論の歴史的展開を言説ジャンルの境界を横断する視点から考察することである

イギリスやフランスにおいては、すでに 19 世紀の半ばまでに、都市の群衆という存在は様々な観点から考察の対象になっており、群衆をテーマにした代表的な文学作品（ポー、ユゴー、ボードレールなど）が多数生み出され、19 世紀末の群衆心理学（ガブリエル・タルド、ギュスターブ・ル・ボン）の成立によって群衆論はその古典的な形式を見出したと言える。それに対して、ドイツにおいては、E・T・A・ホフマンのような先駆的な例があるものの、文学・哲学・社会学・心理学などにおいて、群集が避けて通れない重要なテーマとなるのは、ようやく 20 世紀に入ってからである。

本研究では、対象とする時代（20 世紀初頭から 1930 年代まで）を群衆論の理論的なパラダイムの変遷にしたがって 4 つの時期に分けて考察する。また、本研究では学際的アプローチにより異なる言説領域で生み出された様々な群衆をめぐる言説を領域横断的に考察する。これによって本研究は、これまでひと括りにして論じられることが多かったヴァイマル共和国時代の群衆をめぐる言説に、じつは共和国の社会的・文化的変動にともなう支配的な問題設定の変化が存在することを明らかにすることを目指す。また、それによって、ヴァイマル共和国の歴史記述や文学史において定着している時代区分との関係において、多様な群集論をより厳密に位置づけることになるはずである。

さらに本研究では、上述のようなヴァイマル共和国時代のドイツで生み出された群衆をめぐる言説とそれとの関連で論じられた大衆文化的な諸現象を、同時代に日本の言説および文化現象と比較することもまた、試みられている。具体的には、ヴァイマル共和国の中期から末期（1920 年代半ばから 1930 年代はじめ）の大衆文化状況とそれをめぐる言説を、大正時代から昭和初期におけるいわゆるモダニズム文化をめぐる当時の言説との比較検討を行うことになる。このような比較分析は、本研究の射程を今後の研究のためにさらに広げていく準備となるものである。

３．研究の方法

本研究は現実に生じた群衆の運動を考察対象とするのではなく、ドイツ語圏では 20 世紀に入ってから本格的に主題化されることになる群衆という現象をめぐって産出された言説の展開を分析する。すなわち、本研究は言説史的研究である。

群衆を主題とする言説史的分析を遂行するにあたって、本研究では、学際的アプローチを採用した。これまでの研究では、文学、哲学、社会学、心理学、精神分析学における群衆についての言説が、それら言説分野間の相互関係を十分に視野に収めることなく個別に論じられることが多かったが、本研究ではそれらの言説を共通する視点や問題意識にもとづいて相互に関係づける。そうすることによって、個別学問分野の枠内に限定された考察では見えてこなかった群衆論のパラダイムを明らかにすることが可能となる。本研究は、領域横断的な群衆論の分析によって、当時の群衆をめぐる言説のパラダイムの歴史的展開を明確に提示しようとするのである。

また本研究は、上述の学際的アプローチによって明らかになるドイツとオーストリアの群衆論のパラダイムの変遷を、当時の社会的・文化的変動と関係づける。社会の大きな変動が、言説史におけるパラダイムの推移と対応していることを示すことが目指される。

加えて、本研究は文学作品に表れる群衆の形象の考察を、群衆をめぐる同時代の理論的言説の展開に関係づけて考察することによって、文学的実践と理論との複雑な緊張関係にも着目する。そのさい、注意が向けられるのは、理論的考察や概念形成が文学作品に与える影響だけではない。群衆体験に含まれる不合理な要素、したがってまた理論化の試みが困難に直面する要素に対して文学作品が示すより深い洞察や形象化能力にも注目することになる。

最後に、ヴァイマル共和国における文化状況と群衆現象を同時期の日本のそれらとの比較においては、1920 年代をグローバル化の先駆的段階とみなし、世界的な資本主義の浸透のプロセスにおいてドイツと日本の社

会が直面した文化的変容に注目することになる。

４．研究成果

本研究の言説史的分析にしたがうなら、ヴァイマル共和国時代の群衆論におけるパラダイムの形成と変容は、以下に述べるような三つの局面によって特徴づけられる。

第一の局面は、第一次世界大戦の敗北とドイツ革命に続く共和国初期の数年間であるが、この時期には群衆をめぐる数多くの文学的・理論的言説が生み出された。それらの言説において主題となっていたのは、ドイツ革命の日々に出現したような革命的群衆、すなわち、政党組織や軍の規律から離れて、自発的に政治的行動の主体へと自らを組織する群衆であった。このような群衆を対象とする言説は、とりわけ、群衆体験の持つ忘我的・陶酔的な性格を強調し、忘我状態にある集団的主体の行動に秘められた可能性と限界を集中的に考察にした。本研究では、このタイプの言説を、「革命的・忘我的群衆論」と定義し、その諸特徴を分析した。具体的には、ゲオルク・カイザー、エルンスト・トラー、ヘルマン・ブロッホ、パウル・ティリヒらの著作に革命的・忘我的群衆の形象化を見出すことができる。またフロイトの群衆心理学は、このような革命的・忘我的群衆の脱神話化を狙いとしていたとみなすことができる。

つぎに第二の局面として、1924 年頃をひとつの分水嶺として、革命的・忘我的群衆論とは異なる理論的枠組みに依拠する一連の言説が生み出されるようになる。本研究では、この新しいタイプの群集をめぐる言説を、そこで主題化されている群衆の特徴にしたがって、「合理的・機能的大衆論」として考察している。共和国中期に支配的になるこの言説の背景には、相対的安定期に開花した大都市文化とマスメディアの経験がある。この新たなタイプの言説において Masse（群衆、大衆）という概念が指し示すのは、もはや政治的行動の主体として街頭に姿を現すような群衆ではなく、大衆社会に特有の合理的・技術的な諸システム―当時、そのようなシステムの代表例とみなされたのは、交通、メディア、電力のネットワークであった―に媒介された存在としての大衆であった。それゆえ、合理的・機能的大衆論は、初期の言説とは対照的に、Masse を技術的合理性によって特徴づける。この大衆は、もはや集団としてある特定の空間に現前している必要はなく、むしろ現象形態としては拡散し、不可視になる傾向がある。このような大衆の形象は、ヘルムート・プレスナーの人類学的・社会学的考察や、ジークフリート・クラカウアーの大衆文化分析、アルフレート・デープリーンの長編小説などに見出される。

さらに第三の局面として、ヴァイマル共和国末期には、群衆論のパラダイムが再度、根底的な変容を蒙ることになる。この変容を象徴する著作は、エルンスト・ユンガーの『労働者』である。ユンガーの『労働者』は、単に先行する合理的・機能的大衆論の理論的布置に変容をもたらしただけではなく、そのようなパラダイム・チェンジをヴァイマル共和国時代の群衆論全体の理論的布置の解体を導くような仕方で遂行している。そこでは、ヴァイマル共和国時代の群衆論にとって構成的な意味を持つ対立概念―個人／群衆（大衆）、社会／共同体、人間／技術など―が、ことごとく解体され、無効となるのである。したがって、『労働者』が提示するヴァイマル共和国末期の理論的枠組みは、同時に群衆論の解体をも意味していた。

いまその概略を述べた三つの局面は、それぞれ全く異なった相貌を持つ群衆論を生み出したのだが、この点はこれまでの研究では十分明確に論じられることがなかった。これまで漠然と 1920、30 年代の群衆論としてひと括りに論じられてきた一連の言説に明確な区分を導入し、それらの言説に見出される理論的布置の変容を指摘したことは、本研究の主要な成果のひとつと言えるだろう。また本研究によって、ドイツ語圏の群衆論をフランスや英国など他国の群衆論と比較する基礎も確立された。

本研究で考察された以上のようなドイツ・オーストリアの群衆論の歴史的展開については、個別の論文とともに、この研究課題の助成期間中に執筆・提出された博士論文のなかで集中的に論じられた。これらの成果については、現在、書籍としての発表を目指して作業がなされている最中である。

本研究ではまた、以上の成果に加えて、それを土台にしつつさらに対象領域を広げた成果が論文および口頭発表として提出されている。まずヴァイマル共和国時代中期における合理的・機能的な群衆のイメージを描いた代表的文学作品であるアルフレート・デープリーンの長編小説『ベルリン・アレクサンダー広場』について、そこで描かれたベルリンの都市空間の有様を、一方では当時実際に進行していたアレクサンダー広場改造計画との関連で考察し、他方ではデープリーンの小説の映画化（フィル・ユツィとライナー・ヴェルナー・ファスビンダー）における都市空間の描写と比較している。ここではベルリンという都市空間とその表象が、芸術ジャンルを横断する視点から論じられている。

さらに本研究で特権的な考察対象となった 1920 年代から 1930 年代のベルリンにおける大衆文化をめぐる言説は、同時期の日本の大都市で展開した大衆文化をめぐる議論とも比較考察された。そのさい、二つの観点か

ら両者の比較分析がなされている。第一の観点は、同時期のベルリンと東京において、ともに新たな女性のイメージが登場し、それがアメリカニズムと大衆文化状況との関連で論争的主題となった点に注目し、そこに作用していた力学の同一性と差異に光を当てている。第二の観点は、ドイツと日本において当時初めて本格的に発展した情報メディアおよび交通システムに支えられ、機能的システムとして知覚された都市の経験が、ベルリンと東京においてどのように反省されたのかに注目する。ベルリンでは機能化された空間において意味を失っていく場所の固有性に拘泥し、都市を消え去りつつある記憶の場所として記述する遊歩文学が誕生したが、東京では流動する都市の現在を、街頭の表層分析と統計的記録によって記述しようとした考現学が誕生した。この二つの都市記述の背後には、共通の大都市経験が見出される。これらの比較分析はまだ始められたばかりであり、今後、方法論的にも内容的にも深められねばならないが、本研究ではそのような今後の展開のための素地が形成され、最初の成果が国際学会で発表されることとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① Takeshi Ebine、Erfindung von „Girl-Kultur“: Eine vergleichende Betrachtung des Amerikanisierungs-diskurses der Zwischenkriegszeit in Deutschland und Japan. ドイツ文学、査読有、2010、印刷中
② 海老根剛、交通都市と欲望の迷宮　デーブリーン／ファスビンダーの〈ベルリン・アレクサンダー広場〉、noboy、査読なし、No.30、2009、68 頁-73 頁
③ 海老根剛、群集と〈交通〉−ヴァイマル共和国中期のドイツにおける群集論の変容、表現文化、査読有、No.2,2007、39 頁−70 頁

〔学会発表〕（計２件）
① Takeshi Ebine、Protokoll der Kontingenz: Zu den Großstadtdiskursen im Jahre 1929 in Berlin und Tokio、Thirty-Third Annual Conference of the German Studies Association、2009 年 10 月 11 日、Crystal Gateway Mariott (Washington, D.C.)
② Takeshi Ebine、Erfindung von „Girl-Kultur“. Eine vergleichende Betrachtung des Amerikanisierungs-diskurses der Zwischenkriegszeit in Deutschland und Japan、Die Asiatische Germanistentagung 2008、2008 年 8 月 28 日、金沢星稜大学

〔その他〕
海老根剛、忘我・交通・形象　ヴァイマル共和国時代のドイツにおける群集論の展開、博士号学位論文、東京大学、2008、計 199 頁（原稿用紙換算 620 枚）

６．研究組織
(1)研究代表者
海老根　剛（EBINE TAKESHI）
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00419673

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし